
魔王城への許可証

中路太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

魔王城への許可証

【Nコード】

N8196C

【作者名】

中路太郎

【あらすじ】

辛い旅を終えて、何とか魔王城へと辿り着いた勇者一向。しかし、その扉は硬く閉ざされ、中に入る事はできない。辺りを窺った勇者達はテントを見つけ中へと入る。そこには、蜥蜴の顔をした年老いた一人の魔族がいた。

「許可証？」

「あい、許可証」

裏返ってしまった声に、魔族の老人は相手の無知を示すように眼鏡を押し上げた。

四人連れの勇者一行が、かんなんしんく 艱難辛苦を乗り越えて、ようやく辿り着いたのは魔王城。

ところが、その大手門。

巨大な鉄の扉はピタリと口を閉ざし、押そつが引こつが、打とつが、叩こつが、泣こつが喚こつが、一向に開く気配を見せなかつた。

困つた一行が仕方なく周囲を見てみると、扉から二十メートルほど離れたところに、小さなテントのようなものがあつた。

幌状の屋根と、扉代わりの布のカーテンが、風に揺れて手招きしているように見える。

長いこと風雨に曝されているらしく、色はくすみ、布はぼろぼろの状態で、もはやテントとも呼べないかもしれない。

情報を集める為に、四人は其処を訪ねた。

黄ばんだカーテンを腕押し、中に体を入れると、すえた黴臭さが鼻をついた。

明かりは殆ど無い。

差し込む陽の光のみが頼りの中、先の見えない暗闇から表れたのが、この年老いた小さな魔族だつた。

突然現れた勇者一向に臆する様子も見せず、爬虫類顔（文字通り蜥蜴の頭をしている）の鼻先に、小さな眼鏡を乗せて、白い柔らかなヒゲをしごく。

そつして開口一番。

「あい、じゃ、許可証見せて」
やけに事務的な口調でそう言った。

「そんな物持つてない」

無然としてそう答える勇者に、妙に人間臭い、愛嬌のある表情で魔族はため息を吐いた。

「最近多いんだいね、あんた達みたいの。許可証が無いと通れないよ」

戦士がその名に恥じぬ太腕で、石造りのカウンターを叩いた。カウンターには、こちらから見えるように古代文字で何か彫っていた。

桃色の髪をした小柄なウィッチが、そこに書いてある文字を声にして読む。

「……………受付……」

なるほど、と、勇者とプリーストが頷く。

「そんなものはいらん。いいからあの門を開けろ！」

「いるかいらんかは、こちらが決める事だいね。警察機関だって家宅捜索には令状がいるだいね。あんた達がやるうとしてるのは、立派な住居侵入罪にあたるだいね」

「なにおう！」

大声を上げる戦士にも欠片の動揺も見せずに、老魔族は飛んで顔についた戦士の唾をハンカチで拭う。

「待て」

その様子を見て、勇者が体ごと戦士を諫めた。

「確かに、お前の言う事は正しい。しかし、それはあくまで、人間の世界でのルールだ。魔族であるお前達に私達がそれを気にする理由は無い」

そう言っつて、背中に負った大剣の柄に手をかける。

後ろに下げられた戦士も、嬉しそうに腰の戦斧を手を取った。

「アツチを殺すかいね。まあ、かまわんが、しかし、どうしてアツチが殺されなきゃいかんのかいね」

武器を構えた二人を平然と見つっつ、不思議そうに魔族は訊ねる。
「お前が魔族だからだ」

端的に答える勇者に、不愉快そうに眉を顰めたのは彼の仲間のウィッチだった。

受付に小さな体に乗つけた魔族のほうは、なんでもないように頷いてみせる。

「ふむ、魔族だったら理由も無く殺されなきゃいかんのかいね？」

「違う、魔族が悪だからだ」

「悪？」

「そうだ。魔族は田畑や村を焼き、子をさらい、人を殺す。これを悪と言わずして何と言う」

「うーむ、それは確かに悪だね」

呻りながら神妙な顔で頷いてみせる。

不器用に組んだ腕には、役所人らしくアームバンドが巻かれていた。

「しかし、アツチは人を殺した事なんか無いだね。村を焼いた事も、子供をさらった事もない。それでも殺されなきゃいかんのかいね？」

「魔族は皆一緒だ」

そう言った勇者の背中を狙って、魔力をため始めたウィッチを、ブリストが慌てて止める。

「そうかいね。…したら、あんた達は、人も殺さなきゃいかんのだいね」

「何？」

老魔族の言葉に勇者は眉をひそめた。

「だって、今言った事はみんな、人間もやってることだね。あんた達が魔族をみんな殺した後、人間も残らず殺してくれるんかいね？」

「そ、それは。……に、人間は仲間で、魔族は敵だから……」

もごもごと口ごもる勇者に対して、一度はプリーストにキャンセルされた魔力をウィッチが再び溜め始める。

「なんか話がループしてるだいな」

ウィッチのほうを気にしつつ、プリーストが勇者に助け舟を出す。「貴方のおっしゃる通りです。ですが、今の魔王はとても好戦的で、頻繁に私達に戦争を仕掛けています。これでは安心して暮らすことは出来ません。ですから私たちは、魔王を倒し世界に平和を……」

「世界って言うのはあんた達だけの物なんかいね」

「え？」

「いや。……しかし、王が戦争を仕掛けるなんてのは当然、と言わないまでも、普通の事だいな。今の魔王様は、一度も自分の為だけに戦争を起こしたことはないだいな。いつも、苦しんでいる民達の為にと想着って、闘ってきただいな」

「それは……」

純粹と言えるほど真っ直ぐな目でそう言われて、プリーストは押し黙った。

「ええい、うるさい！とにかくお前達は敵で、敵は倒さねばいかなのだ！それがイヤならあの門を開ける！」

後ろで様子を窺っていた戦士が、大声しながら魔族に詰め寄る。

「お断りだいな。アッチは魔王様に、許可証のないものは通すなど言われてるんだいな。あんた達こそ、通りたかったら許可証を貰って来るんだいな」

「黙れ！そうまでして命令を守りたいんなら、あの世に行つて一人で守つてろ！」

「待って……」

プリーストの制止の声も聞かずに、戦士が戦斧を振るった。

全てを見透かすような表情で佇む老魔族の眼前に、鈍く光る刃が迫る。

「よせ！」

勇者が叫び、何とか戦士に取り付こうとする。

しかし、筋肉の塊のような腕を振るわれ、呆気なくテントの隅まで吹っ飛ばされる。

「死ね！」

狂気が一瞬で命を刈り取るうとした瞬間、老魔族は見た。

迫り来る戦士の後ろに、不機嫌な表情でデカイ魔力の塊を抱えたウィッチの姿を。

「……………不愉快……………」

ボソリと呟くように言い、無造作にそれを戦士に向かって放り投げる。

「いかん！……………だいな」

戦士の振るおうとした斧を難なくすり抜け、老魔族は両手に魔力を掲げる。

転瞬の後。

光が大拳して押し寄せ、辺りを半円状の爆音が包んだ。

地面の巨大なクレーターに対して、射程内にあった魔王城と呼ばれる建築物は、傷一つ無く其処にたたずんでいた。

音の余韻と共に、テントの残骸がその場に振ってくる。

その一片いっぺんが落ちた場所で、モコツと地面が盛り上がった。

「……………死ぬかと思った……………」

そこから顔を出したのは、魔力を放った張本人であるウィッチだった。

顔中を泥だらけにしながら、何とかそこから這い出る。

「頑丈なヤツだいな」

両手に勇者とプリーストを抱えた老魔族が、呆れたように地面から突き出た戦士の足を見ていた。

「良かった生きてた」

老魔族に礼を述べて、プリーストがそれに駆け寄る。

勇者と二人で引つ張り出すと、戦士は白目をむいて気絶していた。

しっかりと息をしているのを確認して、安心すると同時に老魔族と同じ感想を抱く。

「……………ごめんなさい……………」

老魔族に向かってウィッチが頭を下げた。

「……………馬鹿ばかりで……………」

勇者が顔を赤くした。

しかし、照れくさそうに頭を掻くと、蜥蜴の顔をした魔族の方をしつかりと見つめる。

「今回は悪かった。とにかく一度戻ることにする。こいつの、治療もしなければならぬし。……………それから、良く考える。もう一度ここに来るかどうかを」

「あい。分かっただね」

老魔族が器用に笑顔と分かる顔を作ってヒゲを撫でる。

「行くぞ」

直ぐに踵を返し、戦士を担いで勇者は歩いていった。ぺこりと頭を下げて、プリーストがそれに続く。

「……………貴方……………」

ウィッチが何かを言いかけて、止めた。

「……………また……………」

そう言って立ち去る小さな背中を、魔族は楽しそうに見つめていた。

「大丈夫ですか」

門の鉄扉が開き、武装した兵士達が大挙して来た。

「んー」

それに片手を上げて答える姿を見て、兵士長が呆れたように声を掛ける。

「また、そんな格好で」

「だって面白いんだいね」

おどけて見せるその姿は、兵士の大半にため息を吐かせた。

「大体あなた自身で見張りをする事はないでしょう」
蜥蜴の口が不満そうに尖がる。

「だって、お前達に怪我でもさせたら大変だろう。俺が一番強いんだからさあ」

諦めたように頭を抱える兵士長を見て、老魔族が満面の笑みを浮かべる。

「……とにかく、早い所元の姿に戻ってください」

「わかった」

そう言った途端、老魔族の小柄な体が一瞬で膨れ上がった。

ゴキゴキと音を立てつつ、風船の中で何かが暴れているように、突起したり、引っ込んだりを繰り返す。

兵士のうち気弱な何人かが、あまりの光景に顔を背けた。

グロテスクな変身は五分ほど続き、それが終わったときには、老魔族は逞しい青年の姿になっていた。

顔は人のものになっていたが、額に二本の雄雄しい角が生えている。

その姿を見て、取り囲んでいた魔族の中から「ほお〜」と感嘆の声が上がった。

「大丈夫ですか」

兵士長が駆け寄り、青年の顔を覗き込む。

「全身が痛い」

彼は美貌を情けなくゆがめて、目に涙まで浮かべていた。

「だったら、金輪際見張りは我々に任せてください」

手を差し出しつつ強い調子で言う兵士長に、取り敢えずは殊勝な態度で返事をしておいて、青年は立ち上がった。

「っし、帰るか」

その言葉に兵士達が一斉に駆け出す。

ゆっくりと歩き出した青年に、兵士長が隣についた。

小言をくれるつもりだった。

「……大体貴方はですねえ……ん」

城門をくぐった所で、兵士長は後ろを振り返った。

隣に居たはずの青年が、門の手前で立ち止まっていた。

キョロキョロと城下町の様子を見ている。

「……何やってるんですか？」

「ん……いや、いい国だな」と思って」

ポカンとしていた兵士長が、姿勢を正して青年の方に向き直る。

真剣な表情が青年に向けられた。

「貴方の国ですよ。魔王様」

「………だな」

晴れやかに答えて、第二十四代魔王は城内へと入っていった。

………まるで、ソレこそが魔王城への許可証であるかのような満面の笑顔で。

(後書き)

たった、これだけの短い話を書くのにも、オチが二転三転するといふ事態に。小説書くのって難しいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196c/>

魔王城への許可証

2008年8月29日19時21分発行